魔が堕ちる夜

デーモニックプリンセス

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 謡　堂
挿絵 笹　弘

第一章　デーモニック・プリンセス　006
第二章　人界の魔姫　053
第三章　淫らな水師　110
第四章　敗北者の汚根　175
第五章　屈辱のショーとサディスティック・スパイダー　228

登場人物紹介

Characters

シェリスエルネス・ザーバッハ

魔王ザーバッハの、十人の子の一人。勝気で執念深く、受けた恨みはきっちり百倍にして返す主義。臣下の人望は厚い。

木戸茜（きどあかね）

退魔師の少女。直情径行でケンカっ早い性格。

ギルバ

魔神。かつての権勢を取り戻すため、シェリスエルネスの力を利用しようと企む。

メデューナ

ギルバの部下。卓越した技量の水術使い。芸人気質の楽天家。

ミーティ

ギルバの部下。クモ糸を自在に操る。常に冷静沈着な策士。

『第三章　淫らな水師』より

「クンフー不足ですよっ、シェリス様んっ」
そこには、跳躍したメデューナが、にこやかに笑って、いた。両手でステッキを振りかぶり、その先に水の巨腕を生んでいる。轟、とステッキが振り下ろされる。罠にかかった魔翼の姫君は、背中を鉄塊の如き拳に殴られた。
――バッシャァァァッッ！
水飛沫と共に胸から落ちるシェリス。すぐに身震いしてしまうような冷水に包み込まれた。ドレスの黒地に液体が染み込み、再び濡れた布地を肌に密着させてくる。同時に、周囲の水が水使いの僕と化す。水の蛇たちが、腕といわず脚といわず、全身に蔦のように絡みついてくる。髪の一本一本にまで、細い水流が這い上がってくる。
（――捕らえられるっ！）
戦慄が走る。束縛から逃れようと、魔姫は強引に起き上がろうとした。しかし、突如ズシリとした重みが背中を押さえつけてくる。陽気な笑みを浮かべた水使いが、子供がじゃれつくようにして四つん這いの少女に乗っかったのだ。ドレスをつんと押し上げるシェリスの澄ましたお尻に、豊かで張りのあるヒップが被さって陽気に揺れる。女の左腕が胴を撫で、右腕が首に回された。
「捕まえましたーっ」
「離しなさいぃっ！」

四肢に絡みつく水流の感触に焦って、シェリスは叫んだ。水で縛められ、女の全体重をかけられているせいで、身を起こせない。先ほどのダメージがまだ残っていて、すぐに魔法で吹き飛ばすという訳にもいかなかった。水使いは何人か知っているが、その中にはこうして捕らえた獲物を力任せに八つ裂きにして哄笑を上げるような奴もいる。メデューナがそれをしないという保証は、どこにもないのだ。シェリスの背筋が凍った。

（……まずい……まずいですわっ！）

少女の肢体が緊張で強張る。水使いは、シェリスの白い耳朶に優しく吐息を吹いた。

「そんなに怖がらないで下さいな。痛いことなんか、なにもいたしませんから」

あやすような水師の言葉と共に、絡みつく水たちが奇妙な動きを見せた。舌のような質感とガラスのような冷たい光沢でもって、魔姫のドレスの裏に入ってくる。モソモソと動くそれらは、少女の怯えをほぐすかのように、木目細かい透けるような白い肌を優しく這う。

腿のつけ根や脇の下などが、舌先でチロチロと擽られる。擽ったさで身じろぎすると、くねった腰や腿をベロリと舐め上げられた。ザラリとした感触に、悪寒で全身が総毛立つ。こんな状況で安心などできるはずもない。

「ちょ、ちょっと……！」

シェリスは床から手を離して、舐められないように脇を締めた。肢体をまさぐるひんや

りとした水舌を掴む。だが、いやらしい水流は隙間に染み込み脇をこじ開け、掴んだ手をするりと流れ出てしまう。それどころか、逆に指股をレロレロと濡らしてきた。足の甲にも絡みつき、踵や指先を執拗に丹念に擦り上げてくる。

「ひゃ……くすぐった……っ」

嫌がって暴れても、透明な舌は群がってきた。張り詰めた瑞々しい肉体をしゃぶられ、存分に味見をされる。

「シェリスエルネス様に絡みつきその御肢体をまさぐる水たちは、今は普通の水で御座います。ですが、貴方様とわたくしめの体液を吸い油の如き粘性を得、淫らなスライムと化して悦楽のマッサージ師となるのですっ！」

「わ、私が愛撫如きで屈服するほどウブな女だとでも思っていますのっ⁉」

「うふふのふん、強がっちゃってーっ」

犬歯を剥いて魔姫は威嚇する。しかしその強気は、水師の左手にスカートの上から股間を掴まれた途端、羞恥の紅潮で崩れた。

「ひ、ひゃっ」

揃えられた指が、シェリスエルネスの大事な箇所をぐいぐいと揉む。幾重にも布が挟まっている分、擦られる感覚が際立った。貝の如く綺麗に閉じられた女陰口を誘うように弄ばれ、少女が頬を赤く染める。腿をギュっと閉じて、いやらしい指先を追い出そうとした。

シェリスは目を吊り上げ、背後の女を、きっ、と睨んだ。
「ほうら、茜様に酷いことはできても、自分のあそこを揉まれたくらいで、恥ずかしさで御覧の通り。シェリスエルネス様に淫猥な経験などないのです」
「知ったような口を利かないで！」
指が追い出されると同時に、白い脚線に巻きついた透明な蔦が這い上がってくる。魔姫はスカートの中をモゾモゾと必死に動かして、腿を撫でる水を拒んだ。しかし、水蔦の群れはその抵抗を楽しむように、太腿にじっとりと浮かんだ汗を舐め取り、吸収する。
「ところが、存じ上げているのです。ギルバ様が貴方様を目標と定めた時から、ずぅっと水鏡で監視しておりました故」
親しげに笑った水使いはもがく少女に囁いた。
「シェリスエルネス様の肢体が悩ましくくねるのは、週に一、二度してしまう自慰の時にのみ。両手を浅ましく喘ぐ股間に添え、ご自身も淫らに喘いでベッドの上で寝返りを繰り返す時にのみで御座います」
「へ、変態！」
己の手淫の様子を述べられて、シェリスは思わず叫んだ。この水使いの女は、自分の夜の痴態をいつも見ていたというのか？　身悶えてしまいそうな羞恥が視界を熱く赤くする。それを瞬時に怒りに転化させた彼女は、女を平手打ちしようとした。しかし――。

――グイッ！

「あ――！」

捕らわれた少女は身体を水に締めつけられ、水使いもろとも宙に持ち上げられた。四肢に巻きついた蔦たちが、抵抗する間もなく強引に彼女の姿勢を変えさせる。次の瞬間、シェリスは、ぽちゃん、と元いた水溜りに降ろされた。少し股を開き気味に正座をさせられ、両の腕をだらりと下げさせられている。

水縄に縛られた黒服が、濡れそぼった生地で華奢な手足を包んでいた。肌に密着し、少女の滑らかな肢体の曲線と、そこに蠢く大小無数の水舌の姿を浮かび上がらせる。水着を妖艶に光らせる女が、餅肌をしっとりと湿らせて背後で含み笑いをしていた。

「くぅぅ！」

諦めず腕を振り上げようとするが、申し訳程度にしか曲がらない。それ以上動かそうとすると、水が締めつけてくる。魔翼の姫君は緩やかに拘束されてしまっていた。

腰下を満たすのは、全て水使いに支配された魔水だ。それらが、開き気味の股間に群がる。ショーツの繊維の隙間を通り抜けた水が、ふっくらと盛り上がった女陰に触れた。肉と脂肪で丸みを帯びる腿の白い柔肌を、無遠慮にベロベロと舐め回す。その動きは、魔性の少女の性感を暴くことよりも、その汗を吸い取ることを目的としているようだった。

「こぉっのぉぉぉぉっ！」

と、蒼い双眸を吊り上げた反抗的な少女の喉に左手が添えられた。くすくすと笑うメデューナの吐息が右耳にかかってくる。
「ねぇ、シェリス様。いつもオナニーをする時、耳を枕に擦りつけなさいますね……」
ドキッとシェリスの心臓が跳ねた。確かにそんな癖がある。なにもしてこない布触りに、物足りなさを覚えたことも、あった気がする。
(そ、そこまで観察されていましたのっ?)
振り向くより早く、妖媚な責め手が行動に移った。
「一人では上手く責められなくて、さぞかし寂しかったことでしょう」
シェリスエルネスの耳は形よく尖り、白磁の如き聴覚器に青い血管が透けて見えている。そこに、女の血色のいい唇が触れた。それが開き、生え揃った歯が覗く。
魔姫は緊張で拳を握り締めた。
(大丈夫ですわ、耳を責められたぐらいで、どうにかなるはずが……)
――ギニィッ。
長耳を甘噛みされた瞬間、少女のうなじに妖しい痺れが走った。軟骨を覆う耳肉にメデューナの糸切り歯が歯形を作る。すると、その刹那に蕩けるような電流が生じたのだ。
(ひゃうっ!)
シェリスは唇を噛んで悲鳴を堪える。細長い耳がひくひくと身震いし、視界がチカチカ

する。思わず閉じた瞳の上で、せつなげに睫毛が震えた。
「んぅ……！」
シェリスはなんとか薄目を開ける。今のは初めての刺激に驚いただけだと、自分に言い聞かせた。そして、耳に食いついた水使いの肩を視界に収める。
「ば、馬鹿にしないで下さる？　耳を齧られたくらいで――」
目尻を震わせる魔姫の言葉は無視された。リズミカルに開閉された歯が、細長い耳肉に何度も何度も食い込む。
「あ……！」
断続的に妖しい恍惚感が襲ってくる。それが紫髪の少女のうなじを痺れさせた。背骨の隙間に針を差し込んで擽り引っ掻き、連結を外して脱力させていく。淫猥な技を受けたシェリスの手に、力が籠もった。なにかを掴むように指を曲げ、全身をふるふると震えさせる。
（い、いやだ、耳を噛まれてるだけなのに……っ）
メデューナの空いている右手が少女の戦慄く右手に添えられた。女が無言で微笑み、耳を食む。水に巻きつかれた少女は、背骨をくねらせて濡れた長髪を揺らした。
「う……ぅっくぅ……！　くぅぅ……んっ……ぃっ……、ど、どうしてぇ……っ」
――どうして、気持ちいいの？

そう言おうと唇を開いたシェリスエルネスは、内容を認識して、はっと口を閉じた。
（う、嘘！　気持ちがいい……なんて！）
その狼狽を助長するように、女の赤い舌先が少女の鋭角的な耳の先端に巻きつく。唇が聴覚器の頂点に蛭の如く吸いついた。痛いほど強く吸引しながら、ゆっくりと這い降りてくる。艶かしい舌を絡め、歯形を残し、赤いルージュを引かれた唇が少女の長い耳を蹂躙していく
「い、いやぁ……！」
ざらついた赤肉に唾液たっぷりに這われると、ゾクリと耳が震える。強く噛まれると、身震いするほど妖しい恍惚が走る。戦慄いた彼女は乱暴に首を振って熟練した責め手を振り払おうとする。のだが、女の唇はどこまでも執拗にシェリスの耳を追跡してきた。
（こ、こんなので、感じたくっ、ない……！）
魔姫は水蔦に縛られた不自由な身体を必死に蠢かせる。だが、後ろからしっかりと抱き寄せられてしまった。水使いの柔らかくて温かい豊満な肢体の中で、いよいよ逃げ場がなくなる。
「うん、ふぅぅ……シェリスエルネス様ぁ……」
甘い声を漏らしたメデューナが、フェラチオのように首を前後に振り始めた。女の熱い口膜が耳に絡みついてくる。耳から伝わってくる淫熱に、頭の中がドロドロに溶かされて

しまいそうだ。柔らかい舌と硬い歯が、ネチャリ、ギニィ、と交互に蠢く。弄ばれる少女の聴覚器が赤く淫らに火照っていった。

「あ……ぅ……ぅん……やっ……ゃぁ……」

性感帯の中でも一番脳に近い場所から、巧みな刺激を送り込まれる。唾液を聴器に塗りつけられるピチャピチャという湿音が脳に反響した。

「だ、……だ、め……ですわ……。……も……やめなさ……い……」

魔翼の姫君はゾクゾクする快感に震えていた。耳元で唾液が跳ねる音が、平常心を攪拌していく。視界がぼんやりとしてきたところで、メデューナが熱く囁いてきた。

「お姿を一目拝見したその日より、こうして肌を重ねる瞬間を夢見ておりました……っ！」

「……ぁぅ……くっ、この、このっ！」

シェリスは呆けそうな肢体を鞭打った。腕を振って水使いを押しのけようとする。しかし、水に巻きつかれた腕は思い通りに動いてくれない。もがき続ける魔姫は、いつの間にかびっしょりと汗をかいていた。戦闘による疲労の汗ではない。もっと気だるい、艶かしく官能的な汗だ。肢体に張りつくドレスの裏で肌が火照っている。甘酸っぱく香る汗粒が、瑞々しい肌を滴った。それを、水舌が掬い取るように吸収した。心なしか、一滴雫を吸う度に粘性を帯びてきている。さらに汗を搾り出そうというのか、水蔦が蠕動し少女の肌を揉むようにマッサージし始めた。

メデューナに耳を責められて小刻みに震える魔翼の姫君を、二人の女性の汗と体温を吸って、生温かくなった水が執拗に這う。
「あぅ……ん……！　た、たかが水の分際でっ！」
黒と赤のゴシックドレスの魔姫は、お碗型の胸をグニャァと揉まれて怒声を上げた。
耳から注ぎ込まれた官能の熱は、いつの間にか胸まで伝わっていたらしい。濡れた黒布をきつく押し上げているバストは、武骨な淫撃にも、不快感と割りきれないものを植えつけられてしまう。
束縛されているせいで、そんな不遜な行為を看過している。耳を噛まれたぐらいで、抵抗力を奪われている。自分の不甲斐なさと無礼極まりない責め手共に怒りを燃やして、魔翼の姫君は犬歯が砕けそうなほど強く歯軋りをした。
そこに、メデューナが憤る感情に追い討ちをかけてくる。たっぷり責めた耳から口を離し、笑って一言。
「シェリス様、痒い所はございませんかー？」
――プチィッ。
陽気な水使いのふざけた物言いが、シェリスの怒りを爆発させた。
――蹴散らしてやるっ！
女を押しのけて、蝙蝠状の二対四枚の魔翼が羽ばたく。その赤紫色のビロードの如き皮

膜に、黒い魔力光が満ちる。身体が動かないならば、闇の竜巻で全てを根こそぎ破壊してやるまでだ。だが、その猛々しさも、責め師の指が背中に伸ばされるまでだった。ついーっ、と背中が撫でられる。

「きゃひっ！」

濡れて背中に貼りつくドレスの黒い布。そこに背中の窪んだ線や、コルセットの形が浮いている。その中央を上から下に沿って指腹で撫でられた瞬間、シェリスはビクンと身を強張らせた。集中が途切れ、魔力光は霧散する。少女は、反撃すらできなくなる自分の敏感さに動揺した。

（せ、背中でまで……⁉）

「ふふふ……それでは僭越ながら、わたくしめがマッサージをばっ」

メデューナが、背中を、ついつい、と指で擦ってくる。すると少女は、蟻が背中を這い回るような妖しい刺激に身体を震わせた。熟練者の指先に怯え、魔翼を動かして、女を追い払おうとする。しかし、今度はその翼を掴まれてしまう。

「なにを……する気……っ！」

「翼のある子の背中って、床とかに直接つけることがないから、結構お肌が敏感なんですよねー。他にも、こことか」

少女の背中をいじりながら、女の唇がドレスを破って生えている魔翼に近づいた。肩甲

骨の下辺りから、黒い筋が四本生えている。子供が親指と人差し指で囲めるくらいの太さの根元から、光沢のある棒のような部分を経て、黒く大きい翼は広がっていた。
女の口が、耳を責めた時と一転して大きく開く。硬い歯が、同じく硬い黒棒に狙いをつける。その気配を感じて少女は怯えた。メデューナがどんな淫靡なことをしてくるつもりなのか、見当がつかなかったからだ。予測できないからこそ、怖れが増す。
――かぷっ。
一瞬後、羽の根元を強く齧られたシェリスは、もどかしい苦しみに胸を締めつけられて思わず背を丸めた。肌から生える黒い筋に白い歯がキリキリと打ち込まれると、背中から甘酸っぱいせつなさが広がって魔姫の胸部に満ちる。悶えた少女は両手を床についた。
「うあっ？　うくあっ！　く、くふぅぅぅぅあっっ！」
腕を真っ直ぐに伸ばしたスフィンクスの如き姿勢で、シェリスは未知の恍惚に抗った。
（なんですの、これ……？　羽元を齧られてこんな気分になるなんて……！）
人界の空を飛ぶ鳥と同じく、魔物の羽は骨と繋がっている。そこから送り込まれる刺激は、ダイレクトに魔物の少女の胸骨を細い紐で絞り、肺を締め上げて呼気を吐き出させた。少女は目を伏せて唇を噛み、頭を左右に振る。大人びた顔立ちを泣き出しそうにして、目尻に苦悶の涙を浮かべた。
「あふっ、……かふぅぅぅんっっ！」

「どうです、こうされると動けないでしょう」
赤いマニキュアが塗られた爪で、メデューナが黒いドレスを破く。露わになった黒翼のつけ根には、白い肌の皮が被り黒く透けていた。その先を女の口が丹念に舐り倒す。唾に濡れて光る太い筋を、乳首に対してするように指で摘み、しごく。途端、魔姫の魔翼が、力一杯、ピン、と広げられた。天高く上げられた凧のように張り、動けなくなる。
（やめてっ！　せつないのっ、そうされるとっ、せつないのですのぉおっ！）
普段は、特に意識しているような場所ではない。それなのに、くすくす笑うメデューナが円熟した艶技でしごいた途端、そこは未知の性感帯と化していた。
さらに、思いっきり強くガジガジと噛まれ、少女は大きく仰け反った。
「あっ、き……きゅぅ……きゃきゅぅぅぅっっ！」
狂おしい寂寥感が胸を締めつける。泣きそうなほどに孤独な寂しさが胸に込み上げてくる。このまま、人肌を求めてメデューナでも誰にでも甘えてしまいそうな気分だった。
（いけませんわ……っ、こんな気分は駄目ですわぁぁぁっ！　つ、辛いぃっ！）
背中の愛撫を水に任せたメデューナが、背後からシェリスを抱き締めてきた。たわわな豊乳が魔姫の羽の根元でムニッと潰れ、しっとりとした手が黒布の隆起に回ってくる。鎖骨の下、胸部の弾力たっぷりな隆起が撫でられ、プルンとしたお碗形の美乳がグニッと潰された。さらに、黒いドレスの襟に潜った膨らみの先端を、愛しそうに指が這う。

「ふふ、辛いでしょう、寂しいのでしょう。わたくしめが、今すぐそれを嬌声で癒して差しあげますっ」

「わ、私がなにか辛そうに見えて？」

水に寂寥感の源をしごかれつつも、妖眼を吊り上げた魔姫が強がる。内心を見透かしている水使いが、下から掬い上げるようにして少女の胸肉を掴んだ。

――ギュムッ、ギュムッ、ギュムッ、ギュムゥゥゥゥッッ！

「あ、あん……ぁぁ！　……あ、んぁぁぁぁぁ……」

たちまち、姫君の意固地な態度が崩れた。乳房を絞られるリズムによって、硬かった脂肪塊が解きほぐされていく。巧みな技で餓えさせられた肉体は、メデューナの腕を待ち焦がれた恋人の物ででもあるかのように錯覚してしまったのだ。

徐々に膨らんでいく肉碗が、手の向きを変えた女に横から鷲掴みにされた。指を小指から順番に折り曲げられ、根元から先端へと執拗な搾乳が繰り返される。じんわりと広がっていく温かさが、魔姫に強制的に与えられた物寂しさを埋めていく。

張りを増した乳房を中央に寄せるように捏ねられると、ジンジンする甘美な熱さが生まれた。魔姫の胸に渦巻いていたせつなさと混ざったそれは、少女の白肌にうっすらと紅を溶かし込んでいく。

揉みくちゃにされる肉が、朱色に染まって悶え始めた。潰してくる手肌を、粘り絡みつ

くように押し返す。歓喜に身悶える柔肉の先で、ピクピクと跳ねる乳首が充血していく。少女はその反応を否定して濡れ髪を振り乱した。

（わ、私の身体がこんな女にっ、責められて喜ぶなんて……あってたまりますかっ！）

黒布を押し上げて、どんどんニップルが尖っていく。そこに、メデューナの指が触れた。人差し指と親指でしこった塊を挟み、キュリ、ギュリィィッと摘んでくる。

「はひっ！　ひんぅっ。ひくぅん！」

性感を焦がす電撃が視界を火花で埋める。シェリスは目をぎゅっと閉じ、歯を噛んでそれに耐えた。

（我慢しなさい、シェリス！　我慢するの！　感じては駄目なのぉぉ！）

全身がふるふると震え、乳揉みのリズムに合わせて悩ましい吐息が漏れる。喘ぐような呼吸を恥じて俯くと、紅潮した頬に女がキスをしてきた。

「知ってますよー。シェリス様って好きな男性なんていないんでしょう？　今日から、わたくしが恋人になって差しあげます」

水使いがぎゅっぎゅっと肉の尖塔をしごいてくる。我知らず開いてしまう口から、唾液が零れそうになる。

「ふ……ざ……！　ふざけ……っ！」

このままでは絶対にマズイ、そう戦慄したシェリスは尻尾に力を入れた。この筋肉の塊

で、女を叩いてやるつもりだ。それで陵辱はやまずとも、なにかをせねば。
——だが。
（力が……入らないぃぃ……）
快楽に身悶える魔姫は、悪魔尻尾を弱々しくくねらせることしかできない。なんとか先端を水師の顔まで持ち上げ、ペチッと額を叩く。それが限界だった。直後、水中に落ちた黒い尾をメデューナに掴まれる。
「もうっ。いけない尻尾ね？」
矢尻型の先端が伸びた爪でカリカリと軽く引っかかれる。続いてエナメル質の胴が責められた。細く小さな尾っぽの骨に十本の指が添えられ、縦笛を吹くような動きで一斉にコリコリと圧迫してくる。肉と骨を潰し合わされてしごかれる。その瞬間、シェリスの腔内が熱を孕んだ。尾骨を通って女陰に伝わった小波が、肉襞を少しずつ充血させていく。
「あうんっ？　や、や……！　少し触られたくらいで……何故ぇぇ……!?」
「わたくしが上手いから、でーす」
次の狙いを定めた水師が、掴んだ尻尾を引っ張った。根元にキスをされる。歯並びの綺麗な白い歯が黒いエナメル質の尾に立てられる。そして、横笛を吹くようにして根元から先端までに走らされた。
「ひゃうぅぅぅぅっっ！」

『第五章　屈辱のショーとサディスティック・スパイダー』より

眷属の少女の右手が高々と上げられ、スパンキングされる。被虐の極みにあって、魔姫の頭の中は真っ白になった。心と口の間から、理性という壁が一瞬だけ消え去る。堕ちるには、その僅かな時間だけで十分だった。

「ほ、ほしいぃぃ……」

途端、心がすっと軽くなる。自分のはしたない願望を口にしたことで、心の箍が外れてしまう。

「ぶ……ぶ、ぶっかけてぇぇぇっっ！　全身をぉっ、ドロドロにしてぇぇぇぇぇっっ！」

ボリュームを増した尻が、ミーティの胸部でふらふらと揺れる。汗の芳しい匂いを眷属の少女に嗅がせながら、魔姫は腰を相手の胸に押しつけた。ニット越しに感じる成長前の膨らみの硬い蕾が、柔肉をつんつんと押してくる。その感触ですら淫靡な興奮を高める。

「……よく言えました。素直になったご褒美をあげませんとね」

叫んだせいで息を荒げるミーティが、満足げに笑う。右手をヴァギナに戻してきた。

シェリスは汗塗れの尻肌を陵辱者の眼前で悶えさせる。自ら女陰に力を入れ、責め手の指を貪った。ミーティが右指を鉤型に曲げ、ショベルカーのように肉を掘ってくる。左手に掴んだ尻尾を、ほぐれてきたアナルに捻じ込んできた。

「あぁぁぁぁぁ――――ッ！」

尻の中心から激震が走る。頭をズンッと押し上げられ、揺さぶられる衝撃。快感スポッ

トへと躾られたアナルが、官能の炎で満たされた。
たまらず魔姫は、痛いほど頭を地面に押しつけ、喘ぐ。
「っぅん！　ぅぅん……っ！　は、はひぁっ……ふあぁぁぁぁぁぁっっ！」
全身の毛細血管に血を押し込んで、シェリスはふしだらな嬌声を上げた。魔姫の汗や体液の甘酸っぱい香りが、周囲に充満する。それを嗅いだミーティの頬も、媚薬を吸わされたかのように少し染まってきていた。
「ほらっ、早く。イクのと同時に、ぶちまけられたいでしょうっ」
少し上擦った声で囁かれる。見れば、男根を滾らせきった雄獣たちが、イチモツを固く掴んで揺さぶっている。魔姫が責められる様を食い入るように見つめ、血走った目で射精寸前にまで昂ぶっていた。膨れ上がった醜悪な亀頭がビクビク跳ねながら、白いマグマを漲らせている。そう認識した瞬間、被虐的な興奮が全身を駆け巡った。
瞳が情欲に染まる。心臓がドクンドクンと跳ねた。自分が偽根で射精させられた時の恍惚感と放たれた大量の液体の熱い感触を思い出す。
――こんなに大勢にっ、あんなに一杯かけられたらっ！
ドロドロした白濁液に塗れて呆けている自分を脳裏に思い浮かべる。
「イクからぁぁ……っ……すぐにイクから……っ！　かけてっ、かけてっ、かけてっ！
汚いの私に一杯かけてぇっっ！」

くたくたになった理性には、もう淫らな衝動を押し止める力など残っていない。なにかに取り憑かれたように腰をグラインドさせた。黒く淫らなコスチュームを纏い、魔翼の姫君が一匹の雌となる。

「イクぅっ！　もうイっちゃう！　くぅぅうんんっっ！」

シェリスが白目を剥くのに合わせて、男たちが竿を爆発させた。

――ドビュッ、ドビュウウウウウウ！

シェリスの予想通りの大量のスペルマが降り注ぐ。

「ひみゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！」

雄臭い白濁の雨に包まれる。性奴隷の豪奢な衣装は、たちまち白く染められた。剥き出しの肩に、濁ったスペルマが塗りたくられる。肌も髪もグジュグジュにされながら、解放感に身を委ねる。全身の筋肉が弛緩し、尿道が緩む。

――プシャァァァァァ！

「ふぁぁぁぁぁぁぅぅぅ……」

甘ったるい喘ぎと共に、黄金水が秘部から迸った。愛液、スペルマ、汗、小水。全てのものの香りが混ざり合い、えもいわれぬ性臭を立ち上らせる。

「はー……はぁぁ……んっ、ん……はぁぁぁぁ」

それを鼻腔に充満させながら、シェリスは呆けた瞳で荒い呼吸を繰り返した。

衣装は、発情がもたらすあらゆる肉汁に塗れてベトベトになっていた。黒革の表面は白濁で卑猥にコーティングを施され、スカート部分の薄布は、尿と愛液とですっかり濡れ汚れている。

体温を上昇させ、革服よりも艶かしく自分の肌を妖しく輝かせる魔姫。噎せ返るような淫臭を放ちながら、魔姫シェリスエルネスはたとえようのない屈服感に咀嚼されていた。

瞳から歓喜の涙を流す少女に、ミーティが冷たい恍惚を浮かべながら微笑んだ。

「これからが本番ですよ」

不吉な言葉と共にショーツが引き千切られた。ミーティが離れる。支えを失った腰が落ち、シェリスは仰向けとなった。間を置かず、急に強い刺激を感じて仰け反る。

「ひ……っ！」

まず、腰の括れを細いものが締めつけてきた。背骨に妖しい電撃が走る。それに敏感に反応している間に、乳房の根元がギリギリと圧迫される。血流を止められそうな乳房の中で、血が渦巻くどす黒い快感が膨れ上がった。乳首がビチビチと跳ね、衣装の裏地と擦れて目が眩むほどの甘美な電流を生む。

極めつけは股間だった。糸が二本、ペチコートを乱して、剥き出しの大陰唇に触れる。クレヴァスを潰し、柔肉に食い込んだ。あまりの食い込みの深さに肉ビラが捲れ上がり、サーモンピンクの充血した粘膜がヒクヒクと痙攣する。喜悦が四肢の指を曲げさせた。ド

ロリとした愛液が搾り出される。
黒光りする革を大きく窪ませて、白い糸が少女の肢体に打たれた。両指を宙に躍らせて太い糸を紡ぐミーティによって、シェリスの肢体は次々と縛り上げられていく。
ミーティの手が止まった頃には、亀の甲羅のような形を描くように、糸が張り巡らされていた。股に二本走らされた糸のせいでペチコートが捲れ、淫猥な花弁が露出している。乳根をギュッと絞り上げられた乳房が、見事に美麗な紡錘形となって押し出されていた。
拘束された魔姫が僅かに身を捩っただけでも、きつく整然と縛められた身体中からせつない痺れが湧き起こった。さらに、ミーティが掴んだ糸の端を引っ張ると、縛めがその本領を発揮した。張り巡らされた糸が生ある者のように蠢き、乳房を、尻を、陰阜の膨らみをきつく食い締めた。
達してますます敏感な肌に、身震いするほどの悦楽の電流が流れる。
「ぁっ、あ……！　くぅっあぁぁっ！　くふあぁぁぁぁぁっ！」
「気持ちいいでしょう」
（う、嘘、本当に気持ちいい……）
魔性の糸にギチギチに縛り上げられた魔翼の姫君は驚愕に震えた。拷問のように糸を打たれた箇所から、じんわりと歓喜が滲み出している。糸の端を掴んだミーティが指をくいくい曲げると、全身の糸がさらにきつく肉体を絞る。

シェリスは悲鳴を上げた。複雑怪奇に絡み合った白糸は、少女の敏感な部位を全て網羅して、圧迫してくる。少し胴体を捩っただけで、動きが何倍にも増幅されて、全身の性感帯が責められた。

「あん、ひ……ひぃんっ、ひみいいいいいいっ！　いいいいいいいいっっん！」

舌を突き出して、首を激しく横に振る。

縛めはまだ終わっていない。酷薄に笑ったミーティがコスチュームの右胸をずらしてきた。根元を挟まれた胸肉が、プルンと紡錘形で飛び出してくる。その先端、硬くしこった肉塔に糸が巻きつく。

――ギチッ！

「くはぅぅぅぅぅっ！　あ、だ、めぇぇ……！　かはぁぁぁっ！」

ボンレスハムのようにされた乳首が、電流を撒き散らした。魔翼の少女は背を反らし、ぶるぶると震える。糸使いが指を動かすと、乳房の先端を責める細い悪魔が生き物のように蠢き、ギリギリとか弱い性感帯を絞り上げてきた。

「は、ひんっ！　かひっぁ……かひゃぁぁぁぁぁっっ！」

電撃が、右胸を串刺しにした。脳に、焼き焦がされそうな快楽電流が伝わってくる。肢体の魔縛が食い込んでくるのも構わず、身を捩る。

股間、紫色の茂みの下辺りに、蜘蛛少女の冷たい指が触れた。

「まさ、かっ！　やめてぇぇぇぇぇぇ！」
「陳腐な悲鳴ですね！」
次の瞬間。
――キュッ。
破滅的な刺激がシェリスエルネスを襲った。肉芽が、右乳首と同じくギチギチに縛られたのだ。
「あはぁぁぁぁぁっっ！　ぐぅっ……はくぅぅうっっっん！」
胸部と腰を交互に上下に振って、魔性の少女は悶え泣いた。
糸使いの眷属が、止めを刺してくる。露出した右胸の乳首と、ブラジャー型の胸部に浮いた左胸の乳首、それに肉芽の三点に糸が巻きつき、三角形で繋げられた。
「ひぃっ⁉」
ミーティが指を曲げて糸を引っ張ると、三角形が小さくなり、乳首や肉芽が、臍方向に引っ張られていく。
「んぁぁ――――ッッッ‼　こっ、こっこれっ、これやめてぇぇぇっっ！」
身も世もない嬌声を上げて、シェリスはのたうった。バチバチとした快楽の電流が、三点責めから迸る。肢体への縛めも含めると、爪先から頭頂にまで一気に電撃を撃ち込まれた気分だ。

「じゃ、ボクはそろそろ見物に回りますね。皆さん、後はご自由に……この極悪人の雌豚に、きつくお仕置きをしてやってください！」
周囲の一般人たちを煽り立てると、糸の端を掴んだまま、糸使いが下がっていく。入れ替わりに――。
――クス。
そんな笑い声が聞こえた。ミーティではない。観衆の中の若い女だ。黒い長髪で綺麗な顔立ちの女性が、変態少女を軽蔑しきった目で観察していた。黒瞳に嗜虐心を滾らせて。
「たくさん思い知らせてあげるわ、私たちがどれだけ怒ってるのか……そのいやらしい身体にね！」
ストッキングを履いた女性の脚が持ち上がる。ハイヒールで右の乳房をグリグリと踏み躙られた。ビクビクと震えてシェリスが首を振る。そこはただでさえミーティに残酷な縛めを受け、特別に責められている場所なのだ。感度が数十倍に膨れ上がった敏感な部位は、容易く少女を魔手で搦め捕り、快楽の泥沼へと引き摺り込んだ。ギュッギュッと、堰き止められた血を流すポンプのように、胸肉が踏みつけられる。そのたびに根元が糸に余計に締めつけられた。
「ひ、ひぅ！　イひぃぃぃぃぃっ！」
グニグニと胸肉を抉られる。尖った爪先が糸を繋げられた赤い尖塔に触れると、少女は

歓喜に打ち震え、喘いだ。

「やだ、この子。乳首を爪先で踏んだら、気持ちよさそうにして。サイテー。これじゃ、お仕置きにならないわ。みんなもやっちゃってよ！」

女の声に応えて、周囲の女たちが進み出てきた。シェリスの上に次々と脚が乗せられてきた。弾力のある双乳を妬むように潰し、すらりとした腹を疎ましそうに踏み躙る。美しい魔性の少女を、土で汚れた靴裏で蹂躙して、マゾヒスティックな興奮をジュクジュクと滲ませてきた。わざと靴先を糸に引っかけ、性奴の肢体をくねらせる。貶められる魔欲の姫君は、嫌がるどころか涎を垂らして懇願した。

「イッ！　イぃですぅぅぅっ、踏んでッ……踏んじゃってェッ！　糸が引っ張られへっ、気持ちイいいいいいっっ！」

地に広がった長髪を情け容赦なく踏み躙る。毎日丹念に手入れをしている紫髪、女としての大事な場所。それを嬲られたシェリスは、倒錯的な興奮に包まれた。心の中で目覚めてしまった退廃的な感性が、甘い猛毒となる。シェリスエルネスの心を蕩かし、被虐と愉悦の鎖で縛り上げた。

「かみ……！　わたくひの一番きれひなとこっ、ふんでっ、けがしてぇぇぇぇっ！」

豊かでさらさらとした少女の長髪が、女たちの手で地面に広げられた。無数の脚が憎々しげに蹂躙する。

「ぁ……あ……！」
汚されていく自分を実感し、魔翼の姫君が恍惚に震えた。蕩けた目を細くし、だらしなく口を半開きにする。掠れた熱い吐息を漏らし、至福の涙を流す。
だが、決定的なものが足りなかった。いくら身体中を気持ちよくされても、一番欲しい所に、一番欲しいものをもらえないのだ。先ほど蜘蛛少女に嬲り抜かれて、疼きに疼いている二つの肉穴。いやらしい匂いと粘液を撒き散らしながら悶え泣いている所が、狂いそうなほど熱くなっている。
――おかしくなっちゃうぅ……！　誰か、誰かぁ、ここに……。
と、見上げた頭上に、幾本もそそり立つ剛直が目に入った。
思わず、甘い呼気が漏れる。もはや、シェリスはなにも躊躇わなかった。
「く……くら、はぁ、い……」
表情を淫猥に蕩けさせた少女が何事か呟いたのを受けて、陵辱者たちが耳をそばだてた。
「踏まれるだけじゃぁ……たりない……お、チンチン……」
歓喜の涙が溢れ、シェリスの視界を覆っていく。
「ちょう……だいぃぃ……っ！」
「俺たちのこれが欲しいってのか？　とんだ雌ガキだ……」
雄たちが、舌なめずりをした。女たちがスペースを開け、そこにイチモツをそそり立た

せた男たちが割り込んでくる。
一人の男性が魔姫の腹にペニスの竿を擦りつけてきた。重量感のある肉塊が、ヌルヌルした汚液をなすりつけながら、少女の腹を這い回る。硬く熱い怒張の感触に、幸福感を覚えた。身じろぎした瞬間、淫縛糸が複雑に絡み合って、乳首と陰核が弾けそうなほどの食い込み責めに、シェリスの身悶えがさらに激しくなってしまう。
「くぅぁ――――――あッ！」
嬌声を上げる少女に次々と男が群がり、ペニスを擦りつけてくる。頬に熱くビクビクとする亀頭を押しつけられた。芳しい雄の強烈な匂いを鼻腔に流し込まれる。脳に淫臭を染み込まされた少女の鼻梁を汗が伝う。
淫らに興奮した魔姫の手首が掴まれた。汗ばんだ掌で、強引に男根に奉仕させられる。手肌に触れる熱さ、硬さ、卑猥な雄々しさ。力ずくで剛直を握らされる少女の秘部が、求めるものの形を捉えて白濁しきった愛液を分泌する。悶えるように蠕動し、高熱を孕んだ。
「うぇあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
ヴァギナや肛門を指で突かれるとビクンと身体が跳ねてしまう。まるで自分から腰を振っているように見える。そんなシェリスの痴態に惹きつけられるように、群衆の中で一際体格のよい男が三人、狂った哄笑を上げて少女へと群がってきた。
無理矢理引き摺られたシェリスは、寝そべった男の上に降ろされる。ぺたんと腹の上に

座らされた魔姫の秘部に、天に向いて屹立する肉茎が触れた。赤黒い剛竿に巻きつく太い血管。膨れ上がった亀頭。

「は、はやく、突ひてっ、突ひてぇっ！」

呂律の回らない華奢な魔物の少女が、屈強な腰の上に跨らされて、期待に打ち震える。蝶の羽のような短いスカートから紅潮しきった白い太腿が伸び、淫らに濡れそぼったヴァギナや恥毛を、男のズボンに擦りつけた。

「自分がマゾ雌だって認めたら、入れてやるよ！」

「マゾれす、わたくひ、マゾれす！　チンチン、ほしひですのぉぉっ！」

腰が掴まれ、浮かせられる。少し位置をずらされた次の瞬間、一気に女腔を貫かれた。度重なる愛撫で十分にほぐされた秘肉を、人間の男根が押し貫く。

「うぁっ……うあひぁぁぁぁぁ！」

高貴な肉体を刺し貫かれた魔翼の姫君は、待ちかねた肉の蹂躙に仰け反った。女の本性を露わにしてざわめく腔壁と、快感。灼熱感に腹を焦がされていく。

「あつひっ、ひうんっ、あはぁああぅっ！」

男が乱暴に腰を使う。硬い亀頭がゴツゴツと子宮口を突き上げる。恥も外聞もなくシェリスは泣き喚いた。角と髪を振り回し、責め手の腹筋に手をつく。陰唇を締めて、ヴァギナを男性器に絡みつかせた。深々としたストロークで突き回される。甘い感覚に堕ちてい

く。突かれて喘ぐ雌姫は、己の淫らさを見せつけながら、愛液を撒き散らし、涎と涙を垂れ流した。

「ひぃひぃうるせぇなぁッ！　ほらっ、これでもしゃぶってろ！」

二人目の男が、尻尾を掴んで口に差し込んでくる。シェリスは躊躇いもなくそれを咥え、己の敏感な部位を自分で責めた。童女の如きあどけない表情で矢尻型の先端をしゃぶる。

「あむっ……はぶぅぅぅ、むっ……！」

男根のカリの如き矢尻を甘噛みしていると、頭が真っ白になっていく。腰から生まれる蕩けるような悦楽に、肉体が溶けて消えていきそうだった。身体を男たちに委ねる魔翼の姫君は、陵辱者の虜と化す。淫らな忠誠を示すために、四翼を羽ばたかせながら腰を振り始めた。

「へへ、後ろも好きなんだっけな！」

狂ったように悶える魔物に、三人目の男がむしゃぶりついてきた。後ろから、すっかりボリュームを増してしまった少女の白桃の如き尻を掴んでくる。グイと、前方に傾けさせられた。

「んむぅぅぅ⁉　――んぱぁ、お、お尻もぉ？　は、はやく、はやくぅっ！」

獣姦の味を思い出したアナルが、自ら菊門の窄まりを開く。魔姫は腸液を涎の如く垂らし、ヒップを背後に突き出した。次の瞬間、バックから尻を貫かれる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/